

---

Y

蓮見麻衣

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Y

### 【Nコード】

N0205C

### 【作者名】

蓮見麻衣

### 【あらすじ】

広い家の中には、長い廊下があった。あの廊下の向こうに行きたいと思いつつながら、彼女がそのラインを踏み越えてくるのをじっと待っていた。僕がそのラインを越えるのは、真夜中だけ。今はただ、引き出しの一つに詰まった手紙だけが、彼女の香りを残している。

## 0 手紙

元気ですか。ってさ、そんなこと言わなくなたって分かるよな。隣にいるんだから。

でも僕は（手紙でオレっていうと馬鹿っぽいから僕っていうよ）、こんな風にポストが出来て良かったと思ってるよ。

そうじゃなきゃさ、こんなに正直じゃないよ。まあそれは、そっちも良く分かってることだよな。

何にも書くことないけど、これからはメールじゃなくて手紙にしよう。消せないようにさ。

メールは残らないから嫌だし。僕は字汚いけど、手紙の方が良いと思ってる。

馬鹿みたいだよな。こうやって馬鹿みたいところが手紙って良いのかもしれない。

見直しもしてないから、漢字とか間違ってるかもしれないけど気に

Uへ

しないで。

凄い右下がりになった。クセだな……

じゃあ、また後で会おう。返事はいつでも良いよ。

ただし、いつも喋ってる時に手紙の話題出すのはやめよう。

Yより

Yへ

元氣だよ。それって凄く良いことだと思うけど。

それにしても「U」ってシャレだよな。ダジャレ。優って書けばいいのに。

随分丁寧だね？　なんかあったの？

いや、手紙ってこんなものかな。私はいつもの私通り、だと思ってるけれど。

……ほんと、書くことないね。改めて書くと。あえて書くならやっぱりポストのことかな？

部屋のドアにポストがついてるなんて不思議な家だよな。でも楽しいよね、こういうの。遊び心があるっていうか。

リフォームした時つけたんでしょ？　面白い人だね、デザインした人。

私がここにいるのって、多分高校卒業までだけど（大学になったら1人暮らしするから）、よろしく。不束者ですが……っていうんだっけ。

居候させてもらったこと、本当に感謝してるよ。ありがとう。……

これは叔母さんに言うべきかな。

じゃあまた明日ね。きっともう寝てると思うけど、今からポストに入れに行きます。

じより

コトリ。

真夜中、ドアの外のポストに何かが入れられた。

遠くなっていく足音と、カチャリと遠くでドアの閉まる音が消えるまで、僕は息を潜めて必死に寝たふりをした。音が消えた後、裸足で感じた床の冷たさは驚くほどだった。一瞬全身が震え、焦る気持ちは懸命に抑えながら、手紙を回収して、ベッドへ戻る。うつ伏

せになつて、慎重に手紙を開く。

……ああ、優の字だ。

懐かしさに似たものが込み上げて止まらない。

封筒にも入っていない、一枚の手紙。それがどれだけ貴重で温かくて優しいものであるか。知っている。

僕の書いた汚い文字を、真夜中、優があこの部屋の中で読んでいたのだと思うと、胸が高鳴る。細く丸い字で書かれた優の手紙は、今僕の手の中にあるのだ。彼女の筆跡にはくせがあった。僕は彼女の文字を間違えることは決してない。小さく丁寧に書かれた一文字一文字を人差し指でなぞりながら、あるいは見慣れたその文字を彼女自身のように愛しく思いながら、笑い、泣き、怒った彼女の表情を思い出す。

唐突に、何年か前に家族で行った、山の中のペンションを思い出した。

部屋の木目や、たくさんのお虫、冷たい川。

箱の中から、鳥一匹も飛ばない水色の空を見ていた僕は、あの日初めて空そのものを見ている気がしていた。

彼女は僕にとって初めて感じた「女性」だったように思う。

優は僕の従姉だった。

誕生日から言つと僕が年下になる。しかし歳も学年も同じだった。

恋はあのおとき優がいたときにだけ感じた。

だから、今はただ

あの日のおの音が聞きたい。

## 0 手紙（後書き）

はじめまして。蓮見麻衣と申します。これが私がこの名前で連載させて頂く初めての作品です。諸事情で、一度生まれ変わりました。これからもよろしくお願い致します。

評価は「なにか」感じましたら、どうぞ、よろしくお願い致します。

## 1・ヨーグルト

軋む階段を下りるとリビングがある。父と母と僕の3人で住むには、そこはあまりにも広すぎた。シンと静まりかえる食卓、広すぎるテーブル、母の趣味でもある細やかな白いテーブルクロス。複雑な模様の向こうに見える木目が模様混じって、さらに複雑に見える。

駅が近いのに騒音はまるでない。優れた防音のためだろう、綺麗な好きな母の手によって磨かれた窓から見える外の世界は、いろいろなものが、淡々と動いている。その中の人が、犬が、草木が、黙ったまま、ただ動いている。本当にこの家は「箱」のようだ。美しく整えられたドールハウス。

「優、なんか食うもんある？」

「ん？ ないよ」

優がそのリビングの椅子に座って、白い容器を片手に外を眺めていた。

僕は明け方の雰囲気を感じて、彼女に近付く。

「……なに食べてんの？」

「ヨーグルト。アロエだよ、もうすぐ賞味期限切れそうだった」

「俺の分は？」

僕はテーブルの上の新聞に目をやりながら彼女に問う。優はスプーンをこの夜明けと同じくらい静けさで口に運ぶ。幻想的な光景だった。

「だから、ないよ。これが最後の1個」

「……」

「朝練あるの、今日？」



「なんで？」

「なんでって。もうちょっと遅いでしょ、起きるの。いつも私が一番早いのに」

起きてたんだね、と優はやはり僕の方を向かずに、抑揚のない声で言った。

透明な駅にいるような気がした。ぼんやりと現実ではないように思えてくる。昔、祖父を見送ったあの駅のような、寂しく重々しい空気を思い出す。希薄で澄んだ空気が優からだけでなく、この部屋全体に漂い始めている。

優は家の中から目を背けるように、じつと外の光を見つめる。

「じゃ、俺はパンでも食べるけど……どこだっけ？」

「叔母さんに用意してもらってばかりだから、場所がわかんなくなるんだよ」

「分かってる。……ああ、いや、まあとにかく今は、腹減ったから」  
「それで起きてきたんでしょ？」

結局僕は、一度も優と顔を合わせることではなく、棚の上にパンを見つけて食べ始めていた。

彼女は振り向かない。広いダイニングテーブルが恨めしい。

「優。外に、何かあんの？」

優は一瞬黙った。

「何も。ただ、この時間って空が綺麗だから」

「いつも空綺麗って言ってるだろ」

「……自分が透明になってる気がするの。だから、朝は好きなの」

それを聞いた瞬間、悟ってしまった。

空を見ていたんじゃない。朝を見ていたのだ、優は。

箱の中から。

彼女の話し方はゆったりとしていて、僕を朝に引き込む。笑う仕草も怒る仕草も、どこか遠く、遠く離れたところにある。昨日の晩、紙切れ一枚でも愛しく思ってしまったのはきつとそのせいだ。優を一番近く感じるの、あの瞬間だった。月夜の晩に、照らされた

たった一枚の紙に触れたときだ。  
スズランの花がプリントされたその手紙を、紙の感触まで、僕は  
思い出すことが出来る。

「美味しかったー。ね？」

「俺、食べてないし」

優はやっと僕の方を振り返って笑った。

「……アロエの花言葉、知ってる？」

「アロエに花あんの？」

「あるよ。で、知ってるの？」

「知らない」

蓋についたヨーグルトをスプーンで丁寧に掬い取って、彼女は笑  
った。

そして得意気に語り出す。

「やっぱりね。あのね、アロエには健康、とか万能、とかっていう  
花言葉もあるんだけど」

「うん」

「悲しみ、って意味があるの」

## 2・海の記憶

Yへ

あの後曇っちゃったね。残念。せつかく、朝は綺麗だったのにな。そういえば今日、今まで話したことなかった先輩に話しかけられたんだ。なにかと思ったら、『田辺君の従姉つてもしかして優ちゃんのこと？』だってさ。

有名なんだねえ、田辺君（笑）

名字違つのに良く分かったな、って思ったら……あの先輩に私の話、したんだって？

なんかちよつと複雑そうだったから、気になったんだけど。まあ話したくないなら聞かないよ。ヨーク先輩だったかな。名字は知らない。

……手紙って困るね。毎日会う人と、なんてさ。

だって手紙って、普通遠くの人とするものじゃない？ 姿の見えない人と。

代わりに文字で会うんだよ。文字で、話すわけでしょ。こうやって手紙書くのって、なにか意味があるのかなあ……って考えると、メールって不思議だよな。毎日毎日会ってる人とメールしたって飽きない。どうしてなんだろう？

あ、結構書けた。こんな風に質問しちゃったりとかしてもいい？ まだ居候を始めて1ヶ月。この家のこと分かってきたつもりだけど、まだ分からないところもあるから。

夜も遅いのでこの辺にします。おやすみー。

じより

P・S・Yの字は読みやすいよ。私より「楷書」って感じがするな。

Uへ

もう寝るのかよ。早すぎだろ。まあいいけどさ。

陽子先輩に会った？ じゃあまさかバド部見に行った？ 吹奏楽部入るって言ってなかったっけ？

陽子先輩とはちょっと色々あって。相談に乗ってもらったんだ、中学の頃に。ほら、今はやってないけど、前はバド部だっただろ。

その時にさ。なんの話したかっていうのは……ちょっと。まあもちろん優も出てきたんだけど、あんまり関係ないから気にしないで。まじで。

何メートルか先に、お前の部屋がある。

顔見て話せばいいだけの話なんだけどな。こっちの方がよほど面倒だし、紙だつて勿体ないし。お前の使ってる便箋、高いんじゃないの？ 俺のはそこら辺の文房具屋で買った安物だけどさ。……うん、やっぱり照れるな。これ。

メールはもつと気楽じゃん？ ちよつとした用事でもOKって感じがしてさ。手紙ってなんか大事なもののようない気がするだろ。それなのに、どうしてこんな下らない事、手紙でやりとりしてるんだろつ。

じゃあ、そろそろ寝る。おやすみ。

Yより

P・S・Uの字は女らしいよ、まるっこくてさ。俺には書けない。

翌日優は、朝起きて僕を見るなり輝くような笑顔になった。

「気色悪いな。どうした？」

「ひどー。せつかく、今日すごく機嫌いいのに」

彼女の唇に白いヨーグルトが吸い込まれていく。

「……お前の朝の習慣に俺を付き合わせるなよ」

僕がいつものように夜明けを横目にぐったりしていると、優はまた、空を見つめていた。その真剣な瞳に僕は映っていない。彼女の目に映らないのなら、ここにいない必要はないのに。

夜が明けると、彼女は僕に向き直って「ごちそうさま」と言った。なんとなく、別の言葉を囁かれた気がした。……本当は、何と言ったんだろう。

黒に近い群青色をした海が見える。

白いワンピースを着た細い女が、船の先に立っている。

僕はその人に近付いて、ユウ、と呟いた。ユウ。ユウ？ 誰の名前だっただろう。「ユウ」という名前はあまりにも近しい名前、近いのに遠いような、奇妙な感じがする。どうして僕はこの女性を「ユウ」と呼ぶのだろう。

波が揺れて、彼女が振り向いた。

風が強い。彼女の前髪がぶわりと強引に巻き上げられ、僕は冷たい風に煽られながら必死で目を開いた。

「ユウ」

どちらの声だったのだろう。

僕の声だったのか、彼女の声だったのか。

「優！」

これは僕の声だ。

叫ぶと、彼女は目を伏せて微笑んだ。彼女は今いくつで、僕は今いくつで、何をしているんだろう？ ここはどこなんだろう？

僕と彼女は従姉弟で、僕は。

……ダメだ。記憶がそこまでしかない。

同じ屋根の下で暮らしたあの頃のことなら、いくらでも覚えてい  
るのに。

二人で夜明けを見たあの日々。二人で手紙をやり取りした日々。

初めて彼女と手を繋いだ日はいつだったろう？

きっと二人とも何も知らない、ずっとずっと子どもどものときのことだ。

やわらかい手。細い指先。

彼女の香りの残るあの家を、僕はもう訪れることができない。



### 3・雲とポテト

「……マーナミちゃんっ」

「え？ あ、先輩」

愛美はちょうど椅子から立ち上がるところだった。

濃い油の匂い。元々ファーストフード店の匂いは苦手だ。身体中に纏わりついて、服の繊維の間に油の匂いが染み込んでいくような気がする。

陽子は人の良い笑みを浮かべながら、小走りに近付いてきた。

座ってもいい？

だめ。帰るところなんです。頭ではそう思ったが、そんなことが言える相手ではない。愛美は不自然にならないようにまた席について、笑って頷いてみせた。

陽子も安堵したように笑う。

この人の笑顔は好きだ。ふわっと優しくて、つい微笑み返してしまふ。

陽子はハンバーガーには手を付けずに、ポテトを5、6本掴んで頬張った。

彼女の丸い頬が赤く染まっている。

「最近、寒いですね」

愛美は無意識に呟いた。陽子もガラスの外に目をやる。

「ん？ そうね、雨が降ってるからね」

「毎日曇ってますね」

「マナちゃんは雲嫌いななの？」

雲が嫌い？

愛美は内心首を傾げた。雲が嫌いな人などいるのだろうか。

寒いのが嫌いだから？ 雨が嫌いだから？

「嫌いじゃないです」

「そう？ マナちゃん、空見るの好きって言ってたからさ」

「好きですよ。でも、雲も空の一部だから」

「そっか、なるほど。そういう考え方ね。……いや、色んな考えの人がいるからさあ。あたしはね、雲が好きなの」

陽子はアイステーを口に含む。頬の色が肌色に戻っている。

「青い空に浮かぶ白い雲が好き、ってわけじゃあないのよ。雲って色々種類があるんだけど、あたしは全部好きなの。特に今日みたいな日は好きよ。全世界を雲が覆ってるような日はね」

愛美はぼんやりと向かいに座る陽子を眺めた。不思議なひとだ。

やわらかい笑顔をした優しい人だと思うのに、突然こんな話をする。まるで歌うように、朗々と、自分には到底手の届かない場所の話をする。

不思議ね。ねえマナちゃん、雲ってあったかいと思う？ 冷たいと思う？

あたしこの前見上げてて思ったの。不思議よね。あったかい気もしないし、冷たい気もしないの。ほんとはどっちなのかしら。冷たいのかな、あったかいのかな。

でもあたしはどっちにしても、雲が好きよ。

陽子は朗らかに笑った。

「……マナちゃんって、ユウちゃんと同じクラス？」

「ユウちゃん？ って、ああ、高瀬さん。転校生で、田辺君のいとこの」

そうそう、と陽子は頷いた。

愛美はぼんやりと田辺を思い出す。去年同じクラスだった、地味でもなくて、派手でもなくて、微妙な位置にいた人。顔は悪くなかったような。

対して、彼の従姉だという高瀬優は、目立つ人だ。

きつと転校生でなくても目立っていたらと思う。細い身体。細い髪。目を離れたら雪のように溶けてしまいそうだ、と思ったものだ。彼女より美人な子なら他にもいるが、ふわふわした言動が妙に似合ってたかわいらしいのだ。

「田辺君があの子にぞっこんでさあ」

「ぞっこん、って死語じゃないですか？」

「あたしはね」

陽子はアイステイーを飲みきった。

「死語って言葉自体、死語だって思ってるの。だからこの世にもう死語は存在しないと思う」

「先輩のその論理が分かりませんよー」

本当に不思議な人だ。

陽子はまたポテトを2、3本掴んで食べる。愛美はその様子をじつと眺める。

「とにかく田辺君がユウちゃんに惚れててさあ。……協力してあげてくれない？」

「協力、って。従姉弟ですよ？」

「いとこは結婚できるでしょ？」

陽子はいたずらっ子のように微笑んだ。左右の指を丁寧に舐めて、ふふふ、と声を洩らす。

空の向こうからやってきた、イタズラ魔女の微笑み。

ぐらりと世界が揺れた気がした。

急に息苦しくなる。わたしは、新鮮な空気が吸いたい。

愛美は考える。ここはどこで、どうしてわたしはここにいるんだろう？ 先輩は何が言いたいのだろう？ どうしてこんなことをわたしに頼むんだろう。この人は誰だろう。だって陽子先輩は中学の時から田辺君のことがずっと。

『いらっしやいませー！』

突然、背後で店員さんの声が聞こえて、愛美はハッと気が付いた。ここはお店の中だ。空の中じゃない。

愛美は突然目が覚めたように周りを見て、にこにこ笑っている陽子を恨めしげに見つめた。

「……………ヨーク先輩、またわたしに魔法かけたでしょ？」

「誰が魔法なんてかけるのよ。アンタが寝てただけじゃないの？」

「……………そうかな。で、どうしてそんなこと頼むんですか」

陽子はポテトの容器を丁寧に潰した。

ハンバーガーの包みを開ける。

「だって一つ屋根の下に暮らして1ヶ月経つっていうのに、未だに何にもないって言うんだもん」

「何にもないって……………当たり前でしょ。まだ高校生なんだし」

「あんたどこのオバサンよ。もう高校生なんだから」

「でも、わたしだって従兄がいますけど、別にそんなこと考えたこともないですよ」

陽子は口の中のものを飲み込んで、小さくため息をついた。

「マナちゃんとの二人とは事情が違うんだって」

「どんな事情？」

「田辺君かユウちゃんから聞いてよ。あたしからは軽々しく言えないしねえ」

釈然としない答えに、愛美は呆れた顔をした。

陽子は飄々としている。いつもこうだ。一番肝心なことを言ってくれない。陽子とは中学1年のときからかれこれ4年の付き合いになるが、未だにこの人の言葉を理解できた試しがない。

愛美は外に目を向けた。駅前待ち合わせの人でいっぱいだ。雨が降っているからだろうか。中学生くらいの女の子が傘がなくて困っている。

陽子は笑顔のまま愛美を眺めた。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0205c/>

---

Y

2010年10月8日14時46分発行